

の媒体作製実習と組み合わせて、時間は約540分とし、最終的には1年次の3月までで終了とする。

チャート作製から応用実習の学生の調査結果については、次のとおりであった。作製段階で一番大変だったのは、構図やレイアウトを考えた時期であり、次に情報や資料の収集、原稿作成時であった。活用の頻度が多かったのは、本校1年生を対象とした成人歯科保健指導の実習の場であった。また6つのテーマのうち一番多く活用していたのはう蝕についてであった。活用した頻度に比較してフィールド実習での対象者からの反応があったのは、栄養指導、食事指導、歯周疾患という順であった。

チャートは単に指導を行う上での一手段だけでなく、対象者に合わせて、テーマを掘り下げて作ることで、より確実な専門的な知識と、伝達手段の選択方法などを学びとっていることが分かった。また、歯科衛生士を目指して勉学中の学生が自らの手づくりの媒体をとおして、より詳しい専門的知識や、コミュニケーションのきっかけ、対象者への対応の仕方、指導する楽しさ等を、学びとっているという点で、歯科保健指導の媒体づくりは、問題解決能力の育成のために有効な授業の一つであった。

## 12. 小児の自傷行為により生じた下唇潰瘍の2例

○村上 朝音, 道谷 弘之, 武藤 壽孝,  
金澤 正昭

(口腔外科学第一講座)

口腔領域の自傷行為として、口唇・頬粘膜などを咬むことにより、難治性の潰瘍を生じることが報告されている。

今回われわれは、自傷行為によって下唇粘膜に潰瘍を生じ、治癒までに比較的長時間を要した小児の2例を経験したので報告した。

症例1は10歳男児で、初診6日前、バスケットボールが下唇部にぶつかって、下唇粘膜に下顎前歯による軽度の擦過傷を生じ、それ以来頻繁に下唇を咬むようになったが、家族が下唇部の発赤と下唇粘膜の大きな潰瘍に気付く、その潰瘍は徐々に拡大してきたため、当科を受診した。本症例では、いじめなどの精神的ストレスによる心因性の反応として、下唇を咬む自傷行為を惹起したものと思われ、自傷行為を中止させることにより潰瘍は約2か月で治癒した。

症例2は5歳女児で、初診1週間前、某歯科にて齶蝕治療のため、右側下顎前歯部の浸潤麻酔を受けたが、その直後母親が右側下唇の発赤、腫脹、出血に気付き、翌日には右側の下唇粘膜に潰瘍が形成された。患児はその後同部を歯で咬んだり手指で刺激したりしていたため、潰瘍は徐々に拡大し、改善の傾向がみられないことから当科を受診した。

本症例では、日中患児が母親と接することが少ないことによる心因反応、または、下唇を咬むことによって母親が仕事を休んで自分を病院へ連れて行ってくれるという2次的利益が自傷行為を生じたものと思われたが、自傷行為の中止により、潰瘍は約1か月で治癒した。

以上のような自傷行為では、局所の治療もさることながら、家庭環境、社会環境の問題解決が、より重要であることが示唆された。

## 13. ヒトビリルビン着色歯の検討

○渡辺 一史<sup>1)</sup>, 柴田 敏之<sup>1)</sup>, 大森 一幸<sup>1)</sup>,  
牧 富弥代<sup>1)</sup>, 有末 眞<sup>1)</sup>, 五十嵐清治<sup>2)</sup>  
(口腔外科学第二講座<sup>1)</sup>, 小児歯科学講座<sup>2)</sup>)

【目的】新生児の高度黄疸に伴ってビリルビンが歯に沈着し、着色歯が萌出する現象は周知のことである。しかし、このビリルビン着色歯の診断は、黄疸の既往および着色歯の色調によってのみ行われており、着色歯中のビ

リルビンの証明はなされていない。我々は、これまでラットを用い、実験的黄疸による着色歯中のビリルビン分析法を検討し、これを確立している。そこで、今回、基礎的に得られた知見を基にヒトビリルビン着色歯の検討を